

中世建築と中世思想

愛 宏 出

序

「中世建築と中世思想」というテーマならまず触れねばならない著作がE. パノフスキーの『ゴシック建築とスコラ哲学』（1951）である¹⁾。スコラ哲学の論理とゴシック建築の分節形式の類似がここではっきりと示された。しかし言語表現の優位というパノフスキーの中核的な主張に関しては、否定的に見る研究者のほうが今では多いただろう。具体的に言えば、ゴシック建築の形はスコラ哲学の直接の影響による、という想定はこの著作から差し引かねばならない。したがって今ではこの著作は単に、ゴシック建築とスコラ哲学の形式上の平行関係を指摘したものとして意義を持つに止まる、といってもいいだろう。

おおよそこうした立場で同じ主題に関して企図された著作がラディンク／クラークの『中世の建築・中世の学問』（1992）である²⁾。建築も哲学も高度に専門化し、一つの領域の知識が別の領域の専門家に理解可能になるということはもはやありえない。「さまざまな領域の専門家がそれぞれ各自の分野で中世初期のそれとは質的に異なる推論 reasoning を適用したのである³⁾」として、中世建築史と中世思想史の研究者がおのおのの分野を時代並行的に記述している。また建築作品や思想自体といった最終的成果ではなくそこへ至る過程が重要だとして、建築の分節形式とスコラ哲学の方法としての論理学が扱われる対象となっている⁴⁾。しかしこの著作の二分野の並列的な記述は結果として、単に二分野で平行して事象が進行している、ということを示し得ているに過ぎない。二分野の必然的関連が何ら示されていないのである。またクラークの建築の解釈に限っても問題点を指摘できる。例えば、中世建築でも時代を経るにし

たがって全体的効果が計算されるようになるという見方は一面で正しいかもしれないが、多少とも安易な時代的進化論に寄りかかっている⁶⁵⁾。またロマネスク期からすでに建築家は現場で石工の作業には加わらないという示唆⁶⁶⁾は、先の例と同じく中世建築をルネサンス以後の建築の尺度で見ていることを示している。後に見るように、全体構想の不確定性、そして建築家の現場主義こそが中世建築の特色だと考えねばならないのである。

したがって「中世建築と中世思想」というテーマについて言えば、最終的に建築と思想の二つの領域を統一的に語るという課題が残されている、と言える。いわば一人の言葉で二つの領域を語らねばならないのである。以下はこの試みである。

理想をいえば、この試みを行うには哲学者であると同時に技術史家でもある必要がある。もちろんこれは至難の業である。したがって以下本論では、二次資料から出発することで甘んじなければならない。原理的問題を考えてみようというのが本論の狙いであり、事実関係はまとめるというにとどめる。しかしこの試みがうまくいけば、執拗に繰り返される思想と美術（建築）の短絡的発想を封じるという役割を果たすことができるだろう⁶⁷⁾。

中 世 思 想

中世思想の歴史的概観⁶⁸⁾

中世においても哲学的思考や概念の基礎はまず古代哲学である⁶⁹⁾。一方に、個物よりも抽象的概念としてある普遍を重視するプラトンのイデア思想があり、他方には、個物に実体という概念を与え現実観察をも重視するアリストテレス思想がある。

中世におけるプラトンの系譜では、以後中世のあいだずっと強い影響力を持つアウグスティヌス Augustinus 思想 (345-430) がある。彼による神の照明理論はのちに触れる。もう一つは新プラトン主義の形である。プロティノス Plotinus (c. 205-270) がアリストテレスの方法を使ってプラトン思想を統合的な体系にしたものである。この系譜は偽ディオニシオス Pseudo-Dionysius

(c. 500), エリウゲナ J. S. Eriugena (c. 810-877?) をとおって中世盛期に至る。プラトン自身の著作は『ティマエウス』以外あまり読まれない。プラトンの多くのラテン語訳が出されるのは15世紀になってからである。12世紀のコスモロジストたちにおいて、『ティマエウス』の影響がいわゆる自然哲学として開花するが、12世紀終わりには限界に至り、後退する¹⁰⁾。

プラトン思想は一面でキリスト教に同化されやすい。アイデアを神の観念などに置き換えればいいからである。実際、新プラトン主義における世界の階層的体系、ヒエラルキーのイメージは中世に多く現れる。しかし注意すべきなのは、この流れの思想が、神と現実世界、あるいは神と人間とを同次元で直結させてしまうという点で、場合により異端思想に近くなるということである。したがってこれから問題にするスコラ哲学、例えばトマス・アキナス Thomas Aquinas の体系とは根本的に異なる面を持つ。つまり、中世における世界のイメージとしてのヒエラルキー体系は、新プラトン主義の（一者から個物に流出する）連続構造ではなく、理性で把握される下層と啓示により知識となる上層、あるいは現実領域と超越領域とのあいだに断層を持った体系なのである。

11世紀、12世紀における代表的な思想家はアンセルムス Anselmus とアベラルドゥス Abelardus である。彼らの活動と建築との時代的対応を言えば、アンセルムスがロマネスク期、アベラルドゥスはちょうどゴシックの開始期にあたる。アンセルムス (1033-1109) ではすでに中世盛期の抽象的・論理的思考が顕著である。アベラルドゥス (1079-1142) は旧論理学の世代の最高の論理学者である。中世の学問体系、そしてのちに大学を形成することになる修道院や聖堂付属学校の教育課程は自由七科を基本としているが、そのうちの基礎科目とも言うべき三科が文法、修辞学、弁証法（論理学）である。なかでも中世に特徴的なのは論理学の発展である。論理学は、中世初期にはボエティウス Boethius (c. 480-525) のそれを出発点としながら、12世紀には独自の発展を遂げ、12世紀末からはアリストテレスの論理学が知られるようになる。アリストテレス再発見以前・以後の論理学をそれぞれ旧論理学 logica vetus・新論理学 logica nova と呼ぶ。

アベラルドゥスに見られる12世紀前半の論理学発展は、アリストテレス再発見以前にそれを先取りする動きがあることを示している。そしてそれはヨーロッパ11世紀、12世紀の経済社会の飛躍的發展を背景にしている、と言えよう。

13世紀はアリストテレスの世紀である。アリストテレスの著作は1150年から1250年のあいだ、特に13世紀前半に、ギリシア語から、また一部はアラビア語から大量に翻訳される。たとえば『形而上学』『自然学』『ニコマス倫理学』である。論理学では12世紀までの旧論理学（『カテゴリー論』、『命題論』）に加えて、12世紀後半から『分析論後書』『詭弁論駁論』『トピカ』が、1230年代には『分析論前書』が翻訳されて新論理学となる。また同時にアラビア哲学（アヴィセンナ Avicenna, アヴェロエス Averroes）、そして彼らによるアリストテレス註解も翻訳される。13世紀はまた大学（パリ、オックスフォード）の創立の時代である。スコラ哲学の名の由来するところである。

13世紀のもっとも知られた思想家はトマス・アキナス（c.1225-74）である。トマスが新しいアリストテレス哲学で中世キリスト教思想を大成したのに対して、ボナベントゥーラ Bonaventure（c.1217-74）はアウグスティヌスの系譜を守る思想家である。トマスは、キリスト教の信仰・啓示の世界と理性的推論の世界とのあいだの均衡を達成した思想家と言われる。あるいは、現実から出発するアリストテレス思想と絶対的な神の存在を前提とするキリスト教思想とを総合したといわれる。トマスにおけるこれまでとは異なるアリストテレス的要素の典型的なものは人間の知識の解釈であろう。つまり旧来、人間の知は現実とは別次元の抽象的思考によるというプラトン主義的発想であったものが、トマスにおいて、知は感覚データを出発点としてはじめて可能である、という形に変わるのである。

13世紀末から14世紀前半には、トマスに典型的なスコラ哲学の均衡が崩れる。パリ大学人文学部教授たちを中心とするアヴェロエス主義が二重真理説や知性の単一性説を唱える。つまり理性による推論を推し進めて信仰箇条と矛盾する説をもいとわない。理性的思考が發展することでそれが教義と抵触する場面が増えてくるのである。1277年のパリ司教による異端宣告は教会側からのこ

れに対する警戒心を代弁している。13世紀末から14世紀前半の代表的思想家ドゥンス・スコトゥス J. Duns Scotus (c.1265-1308) とオッカム William of Ockham (c.1285-1347?) では以前にもまして論理学思考は徹底化、精密化されるが、同時に論理的思考の限界づけも厳しくなる。理性に対して懐疑的姿勢をとるのである。そしてオッカムにおいて信仰と理性は完全に分離される。

信仰と理性

中世思想のおそらくもっとも重要なテーマは信仰(啓示)と理性であろう¹¹⁾。まず絶対的な神の信仰がある。それは人間理性の理解を超えた領域の知識、神からの一方的な啓示という形でしか人間には与えられない知識に属する。信仰箇条や聖書のテキストも神の啓示に由来するものである。それらを扱う学、つまり神に関しての学が神学であり、それはあらゆる学の最高段階にある。そして他方で理性的思考による哲学が、古代哲学を基盤に発展する。哲学は特にアリストテレス再発見後の新論理学によって厳密なものへ発展し、13世紀のスコラ哲学に至る。理性は神の領域には及ばないが、神学において補助的な役割を持つ。ただし神学における理性的思考の位置づけは思想家により微妙に異なる。

信仰の領域と理性の領域は相互に排除しあう領域であり相矛盾する、スコラ哲学はその力学のなかで語られる。しかしここでは両者の内的関連という視点で考えてみよう。つまり両者は排除しあうというよりも、相互に補完しあうという視点である。

もう一度歴史的にたどってみよう。まずアウグスティヌスの場合、照明論によって、そもそも人間の知識一般に神の照明が関与しうる、したがって理性と啓示は重複することが多く両者の矛盾・相克といったものは比較的少ない。

アンセルムスでは論理が抽象化・先鋭化するが、神の存在論的証明のごとく神学領域でも大胆に論理思考が貫かれる。その論理的思考の大胆さは、一面でアウグスティヌスの照明論に依拠しているためだと言われるが、他面では啓示の領域を理性の言葉で語りうる、理解しうるという確信があるためだと言われる¹²⁾。つまり後の時代のように理性の限界に気づかないいわば未熟な段階だと

考えられるのである。「知解せんがために信ずる *credo ut intelligam*」(『プロスロギオン』)の言葉はこのような文脈でも理解されよう。信仰すれば、のちにその信仰内容の理性による理解が可能だ、という確信ともとれるからである。

アベラルドゥスの論理学も同様に語られることが多い¹³⁾。実際同時代のアベラルドゥスへの批判は、理性が啓示の領域へ越権しているという批判だと解することができる(ベルナルドゥス)。しかしヴィーラントがつぎのような指摘をしている¹⁴⁾。アベラルドゥスでは一見するとアンセルムスと同様、神学領域をも合理的に説明しようとする結果神学の学知化が推進される、とも見えるが、事実はむしろ逆である。つまり、神学の学知化は理性が自らの限界を認識したため、つまり理性批判の結果である。アンセルムスにはなおあった、人間理性の力の確信はここにはない。アベラルドゥスは理性の限界に気づいているのであり、この点では13世紀のトマスと同じである。そして一見逆説的なのだが、理性の論理的思考が研ぎ澄まされるのと平行して人間理性の限界の意識が明確化するのである¹⁵⁾。

トマスにおいては、理性の能力にはっきりと制限が加えられる。例えば、アンセルムスの神の存在論的証明は退けられる。また三位一体、受肉、復活といった教義は信仰・啓示の領域であり、人間の理解不可能な問題だとして理性による論議からは除外される。理性と啓示がはっきりと峻別された結果である¹⁶⁾。トマスにおいてはアウグスティヌスの照明論は否定され、人間の知の過程に神は介在しない¹⁷⁾。ジルソンの言い方でいけば、アリストテレスの理解が進んだ結果、理性の真の能力が認識されたのである¹⁸⁾。言い換えれば、理性による認識が進んだゆえにこそ理性の権能に制限が設けられ、信仰の領域が確定されるのである。信仰の領域は理性的思考によって正当化されるのである。この事情はアベラルドゥスでも同じであった。

またトマスによれば、信仰と理性が矛盾するということはありえない。一見そう思われる場合は、理性の誤った使用が原因なのである。また、「世界は永遠である」というキリスト教教義に反する論議を理性は反駁できない、といっ

た指摘もなされることになる。もちろん「世界は時間的始まりを持つ」という信仰・啓示の内容が疑問視されているわけではない。ただ理性の限界を超えた論議だというだけである。これはまさしくカントの純粹理性のアンチノミー（自己矛盾）で挙げられた例であり、トマスの深い洞察を証するものである。しかしこうしたトマスにおける信仰と理性の峻別は、我々から見るとほころびも見えてくる。つまり超越的存在は理性理解を超えているとしながらも、しばしば神や天使について語られる。同じくカントを引き合いに出せば、これは先験的（超越的）仮象である¹⁹⁾。つまり、理性が経験の限界以上にまで踏み出すことで誤謬に陥っている、という批判が可能である。理性の論理はその意味でやはり啓示領域を侵犯していると言えるのである。さらに言えば神学というものの定義に同様の誤謬を指摘できるだろう。神学は啓示神学・自然神学といった分類がされるが、後者は理性による推論による神学、前者は理性が補助的な役割しか持たない本来の意味での神学である²⁰⁾。この啓示神学における理性の役割は思想家によりさまざまなニュアンスで捉えられている。つまり啓示と理性の境界領域にあたるここで中世における揺れが見られるのであるが、啓示のみで十分なところをなぜそもそも啓示神学という学として建てるのか、という疑問を呈することができるだろう。おそらく次の時代、オッカムが徹底化する信仰と理性の分離、つまり神学における理性的推論の役割の否定はこうした考えに通じる。

以上のように、トマスにおいてさえ理性が信仰・啓示の領域を侵犯する傾向を持ち、推論的思考によって最終的に神にまでたどり着くという欲求が隠されていると言えるのである。そしておそらく中世の論理学の発展はこうした隠れた欲求がその推進力となっているのである。実際オッカムによって啓示と理性が決定的に分離される時代には、その推進力が絶たれることによってスコラ学的論理の方法は次第に後退していく。人文主義の時代である。そして論理は観察・経験と直結した自然科学にのみ生き残ることになる。しかしこの過程も次に見るように論理学の発展から必然的に導き出されたものである。

スコトゥスになると、論理学の推論はより厳密化され、論証として認める範

囲もトマス以上に限定される。これまで哲学の領域に属した一連の主題が論証不可能として神学に送り返される。スコトゥスでは理性—啓示の重複するところがまったくなくなるのである。神はますます理性の届かないものになる。ただスコトゥスは、哲学（論証）の神学補助としての機能にはいまだ信を置いている。

オッカムはスコトゥスがやった以上に哲学的論証の範囲を限定する。神学における論証の役割も完全に排除される。哲学と神学の分離が完成するのである。彼の思想の要点は周知のごとく経験主義、そして普遍的・抽象的概念を一切認めない唯名論である。論理的推論が事象の本質や原因などを明証することはない。経験的事実の直観知のみが明証的なのである。世界はもはやアリストテレス的因果関係・必然性の世界ではない。世界の実実は神の意思による偶然的なものなのである。こうして信仰（神学）と哲学（理性）の分離は完全なものになる。感覚的経験を越えた神は啓示によってしか知りえないのである。

したがってオッカムにおいて、理性や論理の価値は低下するのだが、ただこうした思想は、これまで以上に洗練され厳密化された論理自身の働きが生み出したものでもある。いわば論理（理性）の自滅現象なのである。

まとめと解釈

以上のごとく信仰（啓示）の領域と理性（推論的論理）の領域との関係は必ずしも矛盾・対立だけでは説明できない。中世哲学史において論理学が発展するのに並行して神学からの哲学の排除が進んでいく。理性が啓示領域へ越境しようという衝動に駆られれば駆られるほど啓示領域の不可侵性がよりはっきりしてくるのである。この一見パラドックスに見える事態は両者が互いに補完しあうという関係を抜きにしては理解できない。

もう一度簡単に振り返っておこう。啓示領域は理性（論理）領域発展の推進力であった。そしてその推進力に駆られて論理が厳密化し理性領域の営為が高度化すればするほど、理性は自らの能力の限界を自覚し、啓示領域の不可侵性が次第に明確化する。しかし、こうした歴史的経過の中でも常に啓示領域と理性領域の境界の曖昧さが存し、それが理性発展の推進力となっていたのであ

る。その曖昧さが理性の啓示領域への越境を誘っていたのである。だから最終的に啓示領域の不可侵性が完全に明確化し、理性と啓示が完全に分離されると、理性的推論すなわち論理はその意義を失うのである。あるいは別の言い方をすれば、論理は啓示を不可欠な触媒として発展しながらも、最終的に論理発展の必然的結果として啓示の触媒機能が失われ論理は自らの存在理由を喪失するのである²¹⁾。

さて信仰とは中世という時代のパラダイムである、と言われる²²⁾。神を頂点とする一種のピラミッド体系として中世思想の体系を考えてみよう。ただし新プラトン主義的な連続構造でなく、上下層のあいだに断層のあるピラミッド構造である。その上層が信仰、下層が理性の領域である。もしその上層をパラダイムと呼ぶなら、下層もパラダイムだと言うべきである。絶対的な神という存在、そして神により意義付けられた現実、という二つの項がキリスト教の教義だからである。古代ではプラトンの普遍、アリストテレスの個物という対照的思想があった。近世では大陸合理論と英国経験論という対照がある。中世思想の上述の構造は、そのような二項対立を許さない時代のあり方だと言えよう。

信仰・啓示の領域とは現代風に言えば、我々の認識能力を超えた世界である²³⁾。中世思想の特色はこの超越領域を語りうる形にしている点である。一般には思想の体系全体を合理的に連続構造として説明する。そうすると体系の外部として捨象される、意識に上らない部分が存在することになる。中世思想では、啓示領域という（現代風に言えば）仮構の構造を上層に想定することで上層の超越領域を意識の射程に入れる。理性の推論では語れないとしながらも、話題としては語ることのできる領域にしているのである。そしてこのような構造を生み出したのはキリスト教というパラダイムであり、このような構造を可能にしているのが上下層の境界の曖昧さである。前者の思想、つまり連続構造の体系を持つ思想は同時代の意識のなかでは完璧なピラミッド構造の世界観としてある。中世の場合の同時代の意識におけるピラミッド構造は、上層が見えない、しかし存在する、と確信されるピラミッド構造である。頭の見えないピラミッド構造と言ってもいいし、富士山の山頂付近に雲がかかっている状態を

思い浮かべてもいい。我々の時代から見れば、これは頭の見えないピラミッドではなく、頭の欠けたピラミッドだと言った方が正確かもしれない。だとすれば、中世思想の構造は不完全な体系という類まれな体系なのである。

さて次に中世建築もこうした中世思想のあり方と平行関係にある。以下でその考察に入るが、前もって結論を示しておこう。

ピラミッド体系の不可視の上層部は建築における全体構想の不確定性に対応する。そして、論理的推論（論理学という方法）が建築の分節的形式に対応するのである。論理学は三段論法に見られるごとく、因果律の鎖状の連鎖で個々の事物を関連付け最終的に全体的体系の形成を目指すための方法だとも言えるが、分節形式も同様である。つまり半円柱などの分節要素は、初期に建設される建築部分（基礎部分）を将来的に建設されるべき部分（壁体などの上方部分）と関連付け、大きな組織を形成していく。中世思想のあり方は、理性による論理的推論が啓示領域の存在によって推進されるという点にあると考えたが、それは不確定な最終ゴール（存在しない頂）に向かう理性の営為だとも言える。それと同様建築においても、全体構想が曖昧な状態で（場合によっては全体構想が存在しない状態で）部分から出発して全体を目指す分節的方法がとられるのである。さらに細かいことを言えば、信仰の領域と理性の領域は相互に補完しあっているとしたが、建築においてこれに対応する事態は、全体構想の欠如と分節形式による部分から出発する方法とが同一事象の表裏の現れである、ということになる。

中 世 建 築²⁴⁾

中世建築の具体的な構想・施工の過程は不分明な点が多く、議論の分かれるところもある。文献や図面資料の乏しさゆえである。その理由はもちろん時代の隔たりによるだろうが、中世建築の本質にも由来する。というのも中世建築の方法は、知識人たる建築家が図面の完成によって構想を完結し、著作によって思想を残す、といったルネサンス以後のあり方と対照的だからである。場合によっては読み書きができない中世の建築家は、石工集団の棟梁として現場で働

く。そして中世では完全な図面が作れない、ということはつまり全体構想が前もって完全な形で具体化されないということである。建築家は全体像を曖昧な形で頭に描きながら、経験的な方法によって部分・細部から全体へと向かう。中世建築のあり方は概略このようなものである。

中世建築の建築運営

中世教会堂建築は完成までに長期間かかったり、さらには最終的な完成に至らない場合もある。また大規模な教会堂の多くでは、中世のあいだずっと建築の一部分をそれぞれの時代様式で更新し続ける、つまり建設工事が恒常的に続いているという場合もある。いわば決定的な最終形体がないのである。大聖堂クラスでは建築局 *opera* が補修などで常に活動しているというのが普通である。また建設途上で最初の構想に変更を加えられることも珍しくないし、財政難や管理上の不注意で建築はすぐに停滞化、無秩序化する傾向を持つ。当初からの決定的な全体構想といえるものがそもそも希薄なのである。

また中世建築ではよく建築途上の重要時点で他所から建築家 *magister* を招いて諮問委員会のごときものを開く。建設中の諸問題を解決するためである。例えば14世紀末ミラノの有名な例では、教会堂立面をどうするかが諮られる。問題の決定が「ただ一人の建築家に限定されるのではなく、諸体験、諸見解の総合を蓄積し、難局に当たったの解決策をいわばそこから取り出して結晶化するのである。」²⁵⁾ 決定が集団的になされると言えるが、また常に構想が可変的なのだとも言える。つまり大げさに言えば、最終形体が未決の状態では手探りで構想が進んでいくのである。さらに建築家の名がわかっているにもかかわらず建築の形が建築家と必ずしもつながらないという事情も、建築形体の集団的決定、構想の恒常的な変更によるのかもしれない²⁶⁾。

中世建築の構想過程

さて構想を具体化する手段と言えはまず図面である。図面には大きく見て二種類ある。建築の床・壁や石膏で作った図面用の床に刻線で引いたもの（後者の残る例は非常に稀）、これはほとんどが1/1の縮尺（原寸大）で、用途は型板を作るため、あるいは直接切石をこれにあわせて作るためと考えられてい

る。最も早い時期の確認例は1190年代²⁷⁾。もう一つの種類は羊皮紙に描いた図面である。最初の例がランスの palimpsest (別のテキストを書いた羊皮紙から一度描かれたあと消された図面が判明したもの) で、これは1230年頃のものである²⁸⁾。施主に見せるため(契約書に規定した例も)という動機が多いと考えられている。縮尺はない。ファサードなど平面を図面化したものが大部分である。したがって12世紀末に原寸大の型板の祖形を刻線で描きはじめ、1230年頃には羊皮紙に縮尺図面を描き始めたという歴史的経過だと考えられる(といっても正確な縮尺や寸法は与えられない)²⁹⁾。この縮尺図の出現とともに建築の構想が平面化し、実際の建築も構造や空間への配慮がなくなるという指摘がなされている³⁰⁾。三次元の表現がなお不完全な当時においては、図面での構想は窓のトレサリーの如き平面的部分にのみ意を注ぐという結果をもたらしたのである。逆に言えば、13世紀の図面出現の時代にあっても三次元空間の表象は完全に図面化できず、構想の三次元的側面は12世紀までと同様建築家の頭の中 (opus in mente) にしかないとも言えるのである。だから、建築家が建築現場から離れると建築工事が進行しなくなるという状況は中世のあいだ常に多少とも存在するのである³¹⁾。

次に建築家の構想において図面よりも重要な役割を果たしたであろうものが型板 (forma, molle) である。建築家は現場の工房で床などにコンパスと定規を使って刻線による原寸大の図面を描きそれに合わせて石工が木で型板を形作る。石工たちはこの型板にしたがって切石を切っていくが、同時にここからさまざまな関連するサイズや形をも導き出すことができたと言われる³²⁾。平面の表現のなかに三次元の要素も含まれているのである。型板の作図において、建築家は例えば柱の断面を決める。その柱はいくつかの添柱の複合からなる。その添柱のおのおのが上方構造とつながっていく。だから型板の断面、つまり柱の水平断面は上方の構造をすでに含んでいると言ってもいい。建築家の頭の中では型板の作図は柱の水平断面を作るといふにとどまらない。型板制作においてすでに三次元的構想がふくまれているのである。そしてこのあり方と切り離せない形で分節形式が生じる。中世は三次元空間の完全な描写が不可能な時

代、換言すれば建築家の頭の中で三次元空間の表象が不完全にしか作られえない時代である。型板はこうした時代に三次元空間を決定づける方法である。建築家は型板の作図において、分節形式を介して平面の形で三次元を手探りしているのである。ちょうど論理学が個物を因果関係で関係付けながら体系全体を目指すように、完成形態における建築全体の像がなお不鮮明な状態で部分・細部を関連づけつつ全体を形成していくのである³³⁾。

建築家は型板制作で三次元を読む、石工も図面や型板の平面から多くを読み三次元形体を導き出すと言われる³⁴⁾。しかし次のように言ったほうが正確であろう。つまり、三次元の表現・表象が完全にできない時代だからこそ、三次元への手がかりは二次元平面の中に含まれざるを得ないのである、と。

解釈と結論

ヴィオレ・ル・デュックは建築辞典の中で、中世建築を古代や近世の古典主義建築と比較して次のような指摘をしている³⁵⁾。古代では各部分の大きさが全体との関係で決まる。部分は建築規模に応じて拡大縮小するので、同一の形が大きくなったり小さくなったりする。中世ではこのようなことは起こらない。窓、入口といった建築部分は建築の規模に関わらず一定の大きさである。中世建築では部分が人間の尺度で決まる、各部分は人間の目の慣れた大きさ、人間的基本サイズになるのである。もちろんヴィオレ・ル・デュックの主張するゴシックの人間主義というのは19世紀のイデオロギーとして捨象すればいいのだが、この指摘は中世建築の本質を突いている。古代には図面がある、あるいは何らかの全体構想の確定手段がある（神殿の常套的な形もそれを容易にするだろう）。建築規模を決定するのは図面の縮尺の数値である。これに対して、中世では最小要素の大きさが決まっている、そしてこれこそが中世建築の大きな特色なのである。

中世では構想と施工は不可分に結びつく。建築家は現場の石工の出身であり、建築構想も現場の具体的方法と切り離すことができないし、また石工技術がいわばその出発点である。単純化して言えば、切石作業からすべてが決まるのであり、各部分のサイズは石工が作る切石のサイズから導き出されるという

ことである。あるいは石工の手仕事の規模が建築部分の尺度となる。つまり、中世建築はいかに技術発展があれ、前機械化期の手仕事労働というありかたに対応した形である。中世建築の特色は、現場主義、構想と施工の不可分性、そしてこれと必然的に結びつくかたちで、古典主義建築のように全体構想がまずあるのではなく個々の部分が出発点となる、という点なのである。

また中世の建築家は（仮に建築家と呼ぶとしても）近世以後の建築家と異なり、設計家の面とあわせてエンジニアの側面を持っており、ヴォールトの構造などからくる技術的問題に常に直面している。つまり、常に先の見えない領域を前にしているのであり、こうしたあり方も、思想に見た上層の欠如したピラミッドという意識構造と対応する。

最後に建築家の使った幾何学について簡単に触れておく。建築家はコンパスや定規を使って型板や建築全体の平面などを作図するが、その方法については謎が多く、さまざま解釈がありうる³⁶⁾。詳しくは論じないが、結論を言ってしまうとこれはシェルビーが構成幾何学 *constructive geometry* と名づけた方法である³⁷⁾。つまりこの幾何学はユークリッド幾何学の学問的知識などではなく経験的な方法である。作図の原理そのものは理解されるわけではなく、単に経験的な作図法の習得である。中世建築家の幾何学は同時代でも真似のできない驚異的な技術として見られるが、これは理論幾何学の理解力によるのではなく、そうではなくて、作図などがその原理の知識なく行われるため、なぜその手続きが正しくて妥当なのかを誰も証明できない、場合によっては建築家自身も知らないからである。だから作図法は原理は伴わず、丸暗記で身につけるしかなかったはずである。建築家の作図する型板は容易に一般の石工に作れない。また石工が型板からさまざまな形を導き出す方法は他の人間にはまったく理解も習得もできない類のものである。中世の幾何学はその入りがたさゆえに神秘化されることがあるが³⁸⁾、むしろ前近代性がその入りがたさの原因なのであり、これこそが「上層の欠けたピラミッド」に対応するあり方である。原理部分という上層がないのである。

註
序

- 1) E. Panofsky “Gothic Architecture and Scholasticism” 1951
- 2) Ch. M. Radding / W. W. Clark “Medieval Architecture, Medieval Learning. Builders and Masters in the Age of Romanesque and Gothic Architecture” 1992
- 3) Ch. M. Radding/W. W. Clark 1992 p. 7-8
- 4) 「最終的成果に至る過程」という言い方には異論があるかもしれない。つまり建築の分節形式は最終的形体でなくて何であろう、という疑問を呈したくなるかもしれない。しかし、こうした言い方はそう間違っていない。ラディング・クラーク自身うまく説明していないので少し補足しておく。論理、分節形式ともども道具・手段という言葉で捉えればいいたろう。論理学については、アリストテレスが哲学の道具（オルガノン）と位置づけており、問題ない。建築における分節形式は、建築家の手段と位置づけられる。三次元空間の表象が難しい時代にあって、建築家が線的要素によって空間をイメージしやすくする手段が柱の分節形式だ、と言えるからである。
さらに言えば、ゴシック建築やスコラ哲学は、こうした手段・道具（論理、分節形式）が自己目的化して形式主義化したところにその特色がある、という見方もありうるだろう。
- 5) Ch. M. Radding / W. W. Clark 1992 p. 76, 97
- 6) Ch. M. Radding / W. W. Clark 1992 p. 35
- 7) なお中世建築史の研究動向は以下の論文に批判的に要領よくまとめられている。
P. Crossley “Medieval architecture and meaning: the limits of iconography” Burlington Magazine 1988

中世思想

- 8) 中世の美学や芸術論についてはここでは触れない。もちろん何らかの経路で理論が作品に反映することはありえようが、それを証するには注意を要する。中世においては理論が作品に直接的に影響するということは原則的に考えられないと言ってもいいのである。そしてそれが当論文の主張でもある。
そもそも中世において美学などは単独では存在しないのだが、美や芸術の理論と
いえばスコラ哲学者が考えたものである。作品の制作と直接結びつく実践的理論はアルベルティなどルネサンスではじめて現れるのである。
- 9) 中世哲学の主要著作を挙げておく。
E. Gilson “La philosophie au moyen âge” 1944 (1976)
“The Cambridge History of Later Greek & Early Medieval Philosophy” 1967
“The Cambridge History of Later Medieval Philosophy” 1982

中世哲学の最盛期は伝統的に13世紀のスコラ哲学、とくにトマス・アクィナスの思想だとされている。ただ近年では分析哲学からの視点で、論理学の諸問題とオッカムなど14世紀思想の記述に重点が置かれてきている。上記のうち第三のものがそれを反映した代表的著作。以下の記述は多くの点でこれらを参照しており、とくにジルソンには多くを負っている。

- 10) 12世紀コスモロジストについての二著作

M.-D.Chenu “la théologie au douzième siècle” 1966

W. Wetherbee “Philosophy, Cosmology, and the Twelfth-Century Renaissance” (Peter Dronke ed. “A History of Twelfth-Century Western Philosophy” 1999)

- 11) E. Gilson “Reason and Revelation in the Middle Ages” 1938 (邦訳 E. ジルソン「中世における理性と啓示」)

- 12) E. Gilson 1944 (1976) p. 755

- 13) E. Gilson 1944 (1976) p. 755

M. Harren “Medieval Thought. The Western Intellectual Tradition from Antiquity to the Thirteenth Century” 1985 (1992) p. 106-7

- 14) G. Wieland “Theologie zwischen Weisheit und Wissenschaft” *Miscellanea Mediaevalia* 22/1 *Scientia und Ars im Hoch- und Spätmittelalter* 1994

- 15) G. Wieland 1994「ただしアベラルドゥスは萌芽として含まれていた成果を全面的に引き出す手段（アリストテレスの形而上学）を持たなかった、ということは周知の事実である。」 p. 523 () 内は筆者

- 16) トマスによれば、神の愛なしでも神の知のよって神学の学知は可能である。 G. Wieland 1994 p. 524 また、能動知性はおのおのの魂に属するというトマスの思想も同じ文脈にある。

- 17) E. P. Mahoney “Sense, intellect, and imagination in Albert, Thomas and Siger” (“The Cambridge History of Later Medieval Philosophy” 1982) p. 623

- 18) E. Gilson 1944 (1976) p. 756

- 19) カント『純粋理性批判』第二部緒言

- 20) トマスにおける神学の位置づけは以下にある。 G. Wieland 1994 p. 524 J. Marenbon “Later Medieval Philosophy (1150-1350). An Introduction” 1987 (邦訳 J. マレンボン「後期中世の哲学1150-1350」 p. 98)

- 21) アリストテレス、アラビア哲学の論議を継承してスコラ哲学で論じられた知性 *Intellectus* 論（能動知性と可能知性）はこうした二領域の境界線の曖昧さとデリケートさを示すと解することができる。

知性論については以下の著作を参照。 J. Marenbon 1987 (第二部)

Z.Kuksewicz “The potential and the agent intellect”

E.P.Mahoney “Sense, intellect, and imagination in Albert, Thomas and Siger”

(二論文とも The Cambridge History of Later Medieval Philosophy” 1982)

22) L.M. de Rijk “La philosophie au moyen âge” 1985 p.112

23) 例えばカントの物自体，ヴィトゲンシュタインの語りえない世界，岩盤の下の世界であり，その岩盤にあたるのが，もはや論理的に正当化できないが絶対的な確信としてある命題（例えば数学の公理）である。トマスはこれを第一原理の知として人間の最高段階の知と位置づける。我々であれば，これは人間の知の能力の限界を示す場と捉えるところである。しかしトマスにおいては，推論という人間の下位的能力を使わないこの知は天使など人間を超えた存在の知に近いものだとされる（J. Marenbon 邦訳 p.149）。

中世建築

24) 建築の方法（構想と施工の過程）に関する著作では，戦後まもなくのシュルビー，プランナーの論文著作が今なお価値を失っていないと考える。近年のものでは，客観的に既知事項を収録しているビンディンクの著作を挙げておく。G.Binding “Baubetrieb im Mittelalter” 1993 以下は簡潔にまとめた例。N.Coldstream “Medieval Architecture” (Oxford History of Art) 2002

また建築の運営，法制などの側面は以下に詳しい。

W.Schöller “Die rechtliche Organisation des Kirchenbaues im Mittelalter vornehmlich des Kathedralbaues” 1989

以下はその他。

R.Recht (dir.) “Les batisseurs des cathédrales gothiques” 1989

W.Müller “Grundlagen gotischer Bautechnik” 1990

D.Conrad “Kirchenbau im Mittelalter. Bauplanung und Bauausführung” 1998

25) G.Binding “Was ist Gotik?” 2000 p.129 ミラノにおける委員会の答申はしかし何ら合理的結論ではない。むしろ合理的討論を装った南北の建築家の伝統的流儀の正当化の試みといえるものである。G.Binding 1993 はカンタベリー Canterbury (1185年) が文献初出としているが，すでに11世紀にランスの聖レミ Reims, St. Remi の例がある。これについては以下参照。

A.Prache “Saint-Remi de Reims” 1978 p.16

V.Mortet “Recueil de textes relatifs à l’histoire de l’architecture en France au moyen âge. XIe–XIIe siècles” p.39

26) 建築家の名前が出てくる13世紀フランスのレイヨナン期の建築に関して作品の建築家への帰属がさまざまに試みられてきたがどれ一つとしての成功していない。G.

Binding 2000 p.60

- 27) W.Schöller “Ritzzeichnungen. Ein Beitrag zur Geschichte der Architekturzeichnung im Mittelalter” *Architectura*19 (1989) まれに縮尺図も存在する。
- 28) R.Branner “Drawings from a Thirteenth-Century Architect’s Shop: The Reims Palimpsest” *Journal of the Society of Architectural Historians* 17, 1958
- 29) イタリアでは北方と対照的に寸法が入る。 V.Ascani “Il Trecento disegnato” 1997
- 30) R.Branner “Villard de Honnecourt, Reims and the Origin of Gothic Architectural Drawing” *Gazette des Beaux-Arts. Mars* 1963 なお三次元の建築模型は中世には存在しないと考えられる。三次元模型がアルプス以北に現れるのは16世紀, イタリアの影響によると言われる。 G.Binding 1993 p.189
F.Bischoff “Les maquettes d’architecture” (“Les batisseurs des cathédrales gothiques” 1989)
- 31) 契約書にも建築家が現場から離れることを規制する条項が時折見られる。
13世紀中頃から建築家が掛け持ちをする傾向が現れる。 G.Binding 1993 p.238
しかしそれも現場での親方 *magister* の代理人というべき *parlier* の制度がそれに伴っており, この場合も *magister* 不在が続けば *magister* の構想を *parlier* が勝手に変えてしまうという事態が生じうる。
- 32) R.L.Shelby “Gothic Design Techniques. The Fifteenth-Century Design Booklet of Mathes Roriczer and Hanns Schmuttermayer” 1977 (邦訳 ロン・R・シェルビー「ゴシック建築の設計術」p.173)
- 33) 12世紀の初期ゴシック段階では型板はまだなかったとも考えられる。ということはこの時期には石工は型板なしで一定の幾何学的手順によって切石を形作ったと思われる。 W.Müller “Le dessin technique à l’époque gothique” (“Les batisseurs des cathédrales gothiques” 1989) p.245 ビンディングによれば型板 *Schablonen* は1220頃現れる。 G.Binding 1993 p.234
- 34) L.R.Shelby “The Geometrical knowledge of Medieval Master Masons” *Speculum* 47 (1972)
- 35) E.Viollet-le-Duc “Dictionnaire raisonné de l’architecture française du XI^e au XVI^e siècle” 1861 (第一巻 *Architecture* の項 p.147, 第五巻 *Échelle* の項 p.143) ヴィオレ・ル・デュックは, 古代建築には *module*, 中世建築には *échelle* という言葉を使っている。
- 36) とくにヴィラール・ド・オンヌクール関係の著作で多く論じられる。
H.R.Hahnloser “Villard de Honnecourt” 1972

R. Bechmann “Villard de Honnecourt” 1993

37) L. R. Shelby 1972

38) 幾何学に神学的意味を求める研究は最近でも存する。以下がその例。

N. Hiscock “The Wise Builder. Platonic Geometry in Plans of Medieval Abbeys and Cathedrals” 2000